

恐怖と勇気、その他

目次

恐怖と勇気

- 一、 怖いという感情
- 二、 真の恐怖とは
- 三、 恐怖心の分類
- 四、 大地震の場合
- 五、 恐怖心と勇気の関係
- 六、 真の勇気とは
- 七、 勇気そのもの

ソクラテス賛美

- 一、 賛美の理由
- 二、 ソクラテス理解
- 三、 内部にあったもの
- 四、 演説形式
- 五、 内的成長（成熟）
- 六、 結び

脳の発達と心の発達

- 一、 脳の発達とは
- 二、 特化の「脳の発達」
- 三、 一般の「脳の発達」
- 四、 五合目から頂上へ
- 五、 新型の「脳」へと

孔子とソクラテスの共通点

子路について

※ 参考文献

恐怖と勇氣

恐怖と勇氣について

むろん、ここで専門的なことをあれこれ話す知識は何もないわけだが、ただ、日頃、われわれが「体験・経験」し、感じていることを少しばかり書き留めてみたいと思う。

人間には、精神的にも身体的にも、その健康を維持するための、外部からの強い刺激に耐え得る「許容範囲」というものがあり、それを越えることは、人間の精神にとつてもまた身体にとつても、極めて危険な状態に陥ってしまう「危険性」があるということである。

例えば、われわれが、何か「怖いもの」（恐ろしいもの）などに直面した時に、われわれは、本能的に悲鳴を上げたり、目をつぶったり、あるいは耳を押さえたり、身を硬直させたり、身を引いたりするのは、すべてそれらは本能的に「自己防衛」が働いているからである。——つまり、外部からの強い刺激を本能的に避けている、本能的に拒絶している、本能的に回避している、あるいは本能的に弱めている。もしそういうものを無防備にまた直接的に受け入れれば、かえって、われわれ人間の「健全な精神」を害するような、或いはまた、われわれ人間の「健全な身体」を害するような、極めて「危険な状態」に深く陥ってしまう可能性が高いからである。

例えば、音楽であれ、雑音であれ、あまりに大きな音が長く続けば、われわれ人間の「耳の機能」を害する危険性があるとともに、精神的にも大きな弊害をもたらすものである。また、何か「怖い映画」を観ている、悲鳴を上げたり、目を逸らしたりするのも、そうすることによって、外部からの「強い刺激」を本能的に弱めているのである。また、様々な「猛獣やヘビ」などを恐れたり、また、「断崖や高い所」などを恐れたりするのも、或いは、「落雷や大地震」などを恐れるのも、みな同じことであり、そのようにわれわれの「心の中」で、「怖い」（恐ろしい）と感じることによって、まさに本能的に「自己防衛」が働いて、自分自身に「……注意しろ！ 注意しないと精神や身体にとつて危険だぞ！」と、「注意を促す」とこととなり、その結果として、われわれ人間は、自分の「健全な精神」や「身体の安全」などを確保していることにもなるのである。

例えば、ドライブに出かけた夫とその息子とが、突然、「交通事故」で亡くなったということを知らされた場合、その死んだ夫の妻であり、また、子供の母親でもある、その女性には、そのあまりにも「大きな衝撃」のために、時には、気を失ってしまうこともあるだろう。それでは、なぜ気を失うという状態になるのかと言えば、それは、その女性の「精神」が耐え得る許容範囲を遙かに超えた「大きな衝撃」であったがために、そのあまりに「大きな衝撃」にほとんど対応できなくなり、そのために正常な「精神状態」を保つためにも、自動的に「失神」（「気を失うこと」）によってこそ、その「大きな衝撃」を断ち切って、自分の「健全な精神」を守っているわけである。逆に、もしその人が耐え得る許容範囲を遙かに超えた「大きな衝撃」を、無防備にまた直接的に受け入れてしまうと、かえって、その人の精神にとつては極めて危険な状態に深く陥ってしまう、時には、気がふれてしまう危険性すらあるわけである。それは、ちょうど許容範囲以上の電流が流れた時に、自動的に「ブレーカー」が落ちて、電流の流れを一時的に止め、それによって配線が切れたり、大火になることを未然に防いでいるのと、まったく同じことである。

それはまた、何も外部からの強い刺激だけではなく、むろん内部からの強い刺激というものも当然あるわけである。例えば、部屋で独り物思いに耽っているような時とか、或い

は過去の何か怖い話や怖い体験などを思い出しては、その思いに強く囚とらわれているような時とか、或いは様々な想像力をフルに働かせて独りものを深く考えているような時とか、その他、その思いなり、過去の何か怖い話や怖い体験なり、或いは何か深い考えなりが、その人の「心の中」で次第に大きな存在となり、そして、その人の「心」（精神）の耐え得る「許容範囲」を遙かに越えるような大きな存在となった時には、やはり「危険な状態」に深く陥ってしまう「危険性」があるということである。

それに加えて、われわれ人間は、一般に、いやな出来事を早く忘れたいと思うのも、また、過去のいやな体験や経験、或いは、思い出や出来事などを思い出すことをいやがるのも、みな本能的に「自己防衛」が働いているからである。そして、いわゆる「怖い」（恐ろしい）という感情が、本能的に働くことによって、かえって、われわれ人間は、自分の「健全な精神」や「身体の安全」などを確保しているということである。だとすれば、そういう感情が、健全に働かないほうが遙かに危険なことになるのかも知れない。もしそうだとすれば、われわれ人間にとつて最も「恐ろしい」（怖い）ものは、いったい何かと問えば、それは、いわゆる『畏敬の念』（畏れ敬おそやまう心）を喪失している「心」ではないだろうか。なぜなら、その「心」を持つてすれば、どのような「不正なこと」も、また、どのような残忍・残虐な「行為」でも、何の躊躇もなく平気ででき得るからである。

一、怖いという感情

ところで、その「怖い」という感情について、もう少し具体的に考えてみたいと思う。例えば、「火」を怖いと思うかどうかを尋ねれば、火は怖い、と答える人と、火は怖くない、と答える人とに大別できるかと思う。その場合、その答えが分かれる「分岐点」は、一体、どこにあるのかと問えば、その一つとしては、恐らく、自分の手に負えるような「火」をイメージしている人であれば、「火」というのは、それほど怖いとは思わないかも知れない。一方、自分の手に負えないような「火」をイメージしている人であれば、「火」というのは、やはり怖いものであるかとも知れない。そして、もう一つは、その人自身、過去に「火」を心の底から怖いと思うような「体験・経験」があったかどうかであり、もしそういう「体験・経験」を持つ人であれば、「火は、ほんとうに怖い」と答える可能性が高くなるとともに、一方、そういう「体験・経験」を持たない人にとっては、それほど怖いとは思わないのかも知れない。

というのも、自分自身、まさに後者の人間であったからである。つまり、子供の頃から、一度も「火」というものを心の底から怖いと思ったことがなかったわけである。ところが、大人になってから、一度、家の仕事場から天上が焦げる程度のボヤを出したことがあって、その時、はじめて「火」が怖いという思いに襲われたわけである。そして、その後、その時のことを何度か思い出しては、あの時、なぜ「心の底から怖い」という感情に襲われたのかをあれこれ考えてみると、それは、次のようなことではないかと思う。

つまり、最初、火が燃え始めた頃の段階では、まだ自分の手でその火を消せるだろうと思っていたので、それほどその火を怖いとは思っていなかったのである。ところが、火がだんだんと燃え広がり、やがて、もうこの火を自分の手で消すことはできないかも知れないという思いに襲われた時に、一気に不安な気持ちが増幅され、そして、やがて「もう自

分の手にはまったく負えないという感情になった時」に、初めて「心の底から火が怖い」という感情に襲われたということである。

例えば、家庭内暴力で親が実の子を殺すという事件が起こることがあるが、それは、一体、どういう心理からの犯行なのかと推測するに、それは、次のようなものではないかと思う。まず、最初のうちは、親にあれこれ口応えする程度であるが、やがて暴力を振るったり、物を壊し始めたりするわけだが、ただこの段階では、まだそれほど心の底から怖いとは思ってはいないものである。というのも、自分の手でまだ何とかなると自分の子供が信じられている限りは、それほどではないが、やがて「もう自分の手にはまったく負えない」という感情に襲われた時に、初めて「自分の子供が心の底から怖い」という存在になる」とともに、このままでは「自分は殺されてしまうかも知れない」という思いに心の底から襲われた時に、初めて「実の子への殺意」というものが生じるのではないかと思う。

つまり、ここで最も大事なことは、まだ何とかなると自分の子供が信じられている限りは、心の底からの「恐怖」は、まだ生じてこないものである。なぜなら、まだ何とかなると自分の子供が信じられている限りは、その人の「心の状態（心の足場）」というものは、まだしっかりとっているからである。ところが、やがてもう自分の手にはまったく負えないほどの荒れ狂った状態になり、もう自分の手ではどうにもならないという思いに心の底から襲われた時に、まだ何とかなると自分の子供が信じられていたその人の「心の状態（心の足場）」というものが、まさに音を立てて崩れていくのを実感することになるのだろう。

そして、その人の「心の状態（心の足場）」が音を立てて崩れていくのをまさに実感する時に、初めて自分の子供が心の底から怖いという思いに襲われるのではないかと思う。ただこの段階では、まだ「実の子への殺意」は、それほどはつきりとした「実の子への殺意」となるのかと言え、それは、このままでは「家庭も家族も自分もその他すべてが崩壊していくしかない」という思いに心の底から襲われた時に、初めて「実の子への殺意」というものが、その人の「心の中」にはつきりと生じて来るのではないかと思う。そして、その親にしてみれば、なぜこのような最悪の結果になってしまったのか、その最も奥深い深淵のところは、本人にもよく分からないということになるのかも知れない。

二、真の恐怖とは

それはともかく、自分は、まだいたって健康だと思って、軽い気持ちで「健康診断」を受けた結果、実は、ガンに深く冒されていたと知った時には、大変なショックを受けるとともに、まだ大丈夫だと思っていた、その人の「心の状態（心の足場）」というものは、文字通り、音を立てて崩れていくのを、まさに実感することになるのだろう。この時、初めて、その人は、「死の恐怖」というものを心の底から実感することにもなるわけだ。

つまり、それまではガンという病気も死という問題も、その人にとっては、まだ直接関係ない、まさに他人事に過ぎなかったわけである。——つまり、それが何であれ、自分に直接火の粉が降りかかってこない限りは、すべては他人事に過ぎないのである。あるいは、自分の家族や自分が大事にしているもの、その他、そういうものに直接火の粉が降りかかってこない限りは、すべては他人事に過ぎないのである。これは、極めて大事な認識であ

り、その人にとって実感の伴わないものは、すべて他人事に過ぎないのである。

例えば、テレビのニュースやドラマなどで、どれほどの人が傷つき死のうとも、その人にとつて実感の伴わないものは、すべて他人事に過ぎないのである。ところが、同じような「体験・経験」を持つ人たちにとっては、決して他人事ではなく、まるで自分のことのようにその「痛み」が実感として分かるということである。つまり、「頭の中」であれこれ分かるということと、「実感」として心の底から分かるということでは、少し違うのではなく、まったく違うことなのである。つまり、「頭の中」であれこれ分かるということとは、厳密には何も分かったことにはならず、一方、「……なるほど、ほんとうにそうだなあ」と心の底から実感として骨身に染みて分かることによつてこそ、初めて、ほんとうに分かったということになるのである。それまでは、ほんとうに分かったということには、決してならないということこそは、極めて大事な認識なのである。

それに加えて、「病氣」そのものが、すべて「怖い」というのではない。というのも、その「病氣」がそれほど深刻なものではなく、何とか対応できるようなものであれば、それほど「怖い」とは思わないものだからである。それゆえ、もうどうにもならないほどの深刻な「病状」になった時にこそ、初めて、心の底からその「病氣」の怖さというものを、まさに身を以つて実感することになるのである。それまでは、ただ「頭の中」であれこれ「怖い」と思っていただけに過ぎず、その「病氣」の怖さというものを、ほんとうにはまだ知らなかったということである。つまり、同じ「病氣」でも、いわゆる「初期段階」と「末期段階」ではまったく違うものであり、そして、もうどうにも手に負えないほどの「末期段階」になった時に、初めて、心の底からその「病氣」の怖さというものを、まさにわが身を以つて実感することになるのである。——それは、すべてのことについて言えることであり、自分に直接火の粉が降りかかってこない限りは、われわれ人間は、意外に呑気なものであるとともに、自分の手にまったく負えないほどの火の粉が直接降りかかってきた時にこそ、初めて、心の底から「怖い」という感情を、まさに身を以つて実感することになるのである、それまでは、ただ「頭の中」であれこれ「怖い」と思っていただけに過ぎず、その真の「怖さ」というものを、ほんとうには知らなかったということである。

すなわち、何を「怖い」と思うかは、それぞれ個人差があるだろうが、しかし、それだとえ何であれ、「頭の中」であれこれ「怖い」と思うことと、「実感」として心の底から「怖い」と思うということでは、少し違うのではなく、まったく違うことであるとともに、自分に直接火の粉が降りかかってこない限りは、すべては、他人事に過ぎず、われわれは、意外に呑気なものであるが、やがて、自分の手にまったく負えないほどの火の粉が直接振りかかって来た時にこそ、初めて、心の底から「怖い」という感情を、まさに身を以つて実感することになるのである。そして、そういう「体験・経験」を踏まえて生み出されて来たものこそは、まさに「生きた知識」であり、一方、「頭の中」だけであれこれ考えて生まれて来たものは、すべてどこかピンぼけになりやすいということである。それはともかく、それがどういうことであれ、安全だと思っていた足場が、音を立てて崩れていくような時にこそ、その人は、心の底から「怖い」という感情を、まさに身を以つて実感することになるのである。

さて、「怖い」という感情は、実にいろいろな意味合いで使われるものである。例えば、身に何らかの危険を感じる場合を初めとして、その他の何らかの被害や損害などを受ける

ことを恐れたり、また、何であれ、何かで失敗や挫折することを恐れたり、あるいは嘘や秘密などがバレることを恐れたり、その他、実にいろいろな場合があるかと思うが、それらは、基本的には、やはりどういう意味合いであれ、その人にとって何か「マイナスの方向」（或いは何か「具合の悪い結果」）へと向かっていくことが予測されるような時にこそ、本来「自己防衛的な働き」として、いわゆる「怖い」という感情が生じて来ることになるかと思う。そして、そういう「怖い」という感情が生じて来ることによって、われわれ人間は、むしろ自分たちの「心や身の安全」を確保していることにもなるのである。

ところで、その「恐怖心」を克服するものとして、一般に「勇氣」というものが必要になって来るかと思う。つまり、「恐怖心」というのは、本来、「自己防衛的な働き」であり、それゆえ、より「本能的な感情」であるのに対して、一方の「勇氣」というのは、その「自己防衛的な働き」である感情に逆らってまでも、すなわち、何らかの「禍」(被害、損害、不幸、その他)をこうむる恐れがあるにもかかわらず、敢えて、その方向に向かって「行動」(言動)していくことであり、それゆえ、「勇氣」というのは、本来、より「意志的なもの」になるわけである。そのように「恐怖心」と「勇氣」とは、まったく別々のものではなく、むしろ極めて深い関係にあるものであり、そのために、われわれの「心の中」では、この二つの「感情」がお互いに「せめぎ合い」を行なっているものである。——例えば、それは、どういうことであれ、その人の「心の中」に「恐怖心」が生じて来た時に、その「恐怖心」に素直に従って、これから行なおうとしている「行動」(言動)を踏み留まる場合と、もう一つは、その「恐怖心」に敢えて逆らってまでも、何らかの「行動」(言動)を行なおうとする場合があるかと思うが、その場合、その人が、どちらの「行動」(言動)を取るかは、その人自身にも、その時になつてみなければ分からないとともに、ある人たちにとっては、何でもないことでも、ある人たちにとっては、死ぬほど怖いというように、それらについても、各人によつてそれぞれみな違つて来るということである。

三、恐怖心の種類

さて、われわれ人間の「心の中」に生じる様々な「恐怖心」としては、まず最初に、ほかの動物たちにも共通した「生得的恐怖心」があるかと思うが、その「生得的恐怖心」こそは、まさに本能的な「自己防衛」に他ならないのである。——つまり、身に何らかの危険を感じるようなものから素早く「逃避」(或いは「回避」)しようとする「心の働き」である。そして、この「生得的恐怖心」というのは、いわゆる「個体維持」のために、恐らく、すべての動物たちに何らかの形で備わっているものではないかと思う。というのも、この地球上に誕生した「生命体」は、実に長い歳月をかけて今日のような実に多種多様な「動植物」へと進化してきたわけだが、その「生命体」そのものは、何よりも「生きよう」として存在であり、そのために、いわゆる「營養衝動」が生じて来るとともに、身に何らかの危険を感じるようなものからは、できるだけ素早く「逃避」(或いは「回避」)しようとする「本能が働いている」ということである。

次に、「学習的恐怖心」があるかと思うが、それは、いわゆる「知識的恐怖心」と「経験的恐怖心」とに大別されるかと思う。まず、「知識的恐怖心」というのは、その人自身、

自ら「体験・経験」はしていないが、例えば、テレビをはじめ、新聞、雑誌、書物、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、その他から、われわれは実に様々な「情報や知識」などを得ているわけだから、そのような様々な「情報や知識」などをもとにして、実にいろいろなことに対して、「恐怖心」を持つようになるということである。ただ、その場合、その人自身、実際に「体験・経験」をしていないので、ただ「頭の中」であれこれ怖いと思っただけであり、いわゆる「実感」としては、よく分からないものである。

一方、「経験的恐怖心」というのは、それがどういふことであれ、実際に、自ら「体験・経験」することによって、その「怖さ」といふものを、まさに身を以って「実感」することになるので、そういう様々な「体験・経験」をもとにして、実にいろいろなことに対して、「恐怖心」を持つようになるということである。——つまり、実際に、自ら「体験・経験」をしている人であれば、ただ単に「頭の中」で怖いと思っただけではなく、まさにわが身を以って「実感」としてよく分かっているということである。それゆえ、そのことについては、極めて微妙なところまで厳密に「感じ分ける」こともでき得るわけである。なぜなら、まさに骨身に染みてよく知っていることだからである。

例えば、大地震を「怖い」と思う場合、その人自身、実際に大地震を「体験・経験」していないならば、それは、ただ単に「頭の中」であれこれ怖いと思っただけであるが、一方、その人自身、実際に大地震を「体験・経験」しているならば、ただ単に「頭の中」で怖いと思っただけではなく、まさにわが身を以って「実感」として、その「怖さ」を知っているということである。それゆえ、その「大地震」については、極めて微妙なところまで厳密に「感じ分ける」ことができ得るわけである。

しかも、ここで最も大事なことは、その人が、精神的にも身体的にもあるいは財産的にも、どのくらい「深刻な被害」（或いは「悲惨な目」）に遭ったかにほぼ正比例して、その人の「大地震」に対する「恐怖心」は、それだけより深刻なものになって行くのである。——つまり、たとえ同じ「大地震」に遭遇しても、それほど大きな被害を受けなかった人たちにとっては、いわゆる「大地震」に対する「恐怖心」は、それほど深刻なものにはならないかも知れないが、しかし、もうどうにも手に負えないほどの極めて「大きな被害」を蒙った人たちにとっては、いわゆる「大地震」に対する「恐怖心」といふものは、どこまでも深刻なものとなり、心の底から「大地震」の怖さというものを、まさにわが身を以って「実感」として骨身に染みて、よく知っているということである。

最後に、「想像的恐怖心」であるが、この「想像的恐怖心」といふのは、その人の「頭の中」であれこれ想像力豊かにものを考えているうちに、いわゆる「恐怖心」が生じて来るというものである。例えば、自分は、ガンやエイズなどの病気にかかっているのではないかと思っただけ、それを恐れたり、また、それは、どういふことであれ、人前で何かをやることになっていて、その時に、自分は、何かとんでもない大失敗をするのではないかと恐れたり、或いは、幽霊やお化け、また、霊魂などの存在を信じていて、そういうものを恐れたり、さらには、何か大地震や火山の大爆発のような天変地異が近いうちに起こるのではないかと恐れたり、その他、そういうふうな、その人の「頭の中」であれこれ想像力豊かにものを考えているうちに、いわゆる「恐怖心」が生じて来るというものである。

四、大地震の場合

それでは、「生得的恐怖心」と「学習的恐怖心」、それに「想像的恐怖心」や「暗示的恐怖心」、その他について、もう一度、ごく簡単に説明を書き加えてみたいと思う。

例えば、「大地震」を例にとつて話をしてみたいと思うが、それは、次のようなことである。――まず、「生得的恐怖心」というのは、いわゆる「大地震」が起こる前には、よく動物たちも、身の危険を感じて、どこかに素早く移動するとか、また、われわれ人間の場合にも、何か虫の知らせとか、何か嫌な予感を感じたりする場合があるかと思う。また、実際に「大地震」が起こった時には、素早くそれに対応して、できるだけ素早く身を安全な場所に移動させようとするものであるが、そのように本能的に「自己防衛」が働くということであり、それが、いわゆる「生得的恐怖心」ということになるわけである。

次に、「学習的恐怖心」のなかでも「知識的恐怖心」というのは、例えば、どこかに起こった「大地震の惨状」などをテレビの映像などで観て、「ああ、地震というのは、ほんとうに怖いもんだなあ、とにかく、一瞬にして、すべてを失ってしまうのだから」という感じで、「大地震」の怖さというものを間接的に知ることになるのである。――つまり、その人自身、実際には自ら「体験・経験」はしていないが、テレビをはじめ、新聞、雑誌、書物、パソコン、ケータイ、スマホ、タブレット、その他から、われわれは実に様々な「情報や知識」などを得ているので、そのような様々な「情報や知識」などをもとにして、実にいろいろなことに対して、「恐怖心」を持つようになるということである。

一方、「学習的恐怖心」のなかでも「経験的恐怖心」というのは、その人自身、実際に大地震を自ら「体験・経験」しているために、ただ単に「頭の中」であれこれ怖いと思っただけではなくて、心の底から「大地震」の怖さというものを、まさにわが身を以つて「実感」として骨身に染みてよく知っているということであり、それは、その人がどのくらい「深刻な被害」（或いは「悲惨な目」）に遭ったかにはほぼ正比例して、「大地震」への「恐怖心」は、それだけより深刻なものになって行くわけである。

最後に、「想像的恐怖心」というのは、例えば、近い将来に「大地震」が起こり、自分や家族、その他が何か大変な災害に遭うのではないかと恐れるということである。つまり、自分や家族、その他、その人にとつて極めて大事なものが、何か大変な「被害や損害」などに遭うのではないかとあれこれ恐れるということであり、それは、何か根拠がある場合もあれば、単なる「妄想」（或いは「思い込み」）に過ぎない場合もあるだろうが、とにかく、その人の「頭の中」であれこれ想像力豊かにものを考えているうちに、いわゆる「恐怖心」が生じて来るということである。それらに加えて、怖いぞ、怖いぞ、と言われているうちに、ほんとうに怖くなってしまふ、いわゆる「暗示的恐怖心」もあるかと思うが、この「暗示的恐怖心」というのは、どちらかと言えば、素直な性格で、人の話をあまり疑わない人に多いかと思う。――例えば、占いや宗教、その他、そういうことで、「悪いこと」などを言われたりすると、もうそのことが心配になり、どこまでも「恐怖心」を深めてしまふということである。

そして、もう一つは、いわゆる「想定外恐怖心」であり、それは、現実にはあり得ないと思っていたようなことを、実際に見聞き経験した時の「恐怖心」であり、例えば、信じられないほどのもの凄い「集中豪雨、超大型台風、暴風雨、土砂崩れ、大洪水、火山の大爆発、大地震、大津波、超大型竜巻、落雷、大量虐殺、その他」、そのようなとても信じ

られないようなものを、実際に見聞き経験した時に生じて来る「恐怖心」のことである。

五、恐怖心と勇氣の関係

最後に、もう一度、「恐怖心」と「勇氣」との関係について、詳しく考えてみたいと思う。まず、われわれの「心の中」に「恐怖心」が生じて来るのは、本来、「自己防衛的な働き」であり、一方、その「恐怖心」を何とか克服して、何らかの「行動」(言動)を行なおうとするためには、どうしても「勇氣」というものが必要になって来るということである。それでは、その「勇氣」とは、一体、何なのか？ それは、その人の「心の中」に生じて来た「恐怖心」と闘って、何とかそれを克服しようとする「心の働き」であり、それは、極めて「意志的なもの」になるわけである。つまり、「恐怖心」が、より「本能的なもの」であるのに対して、「勇氣」とは、より「意志的なもの」になるということである。——例えば、高所恐怖症の人にとって、いわゆる「高い所に立つ」ことは、死ぬほど怖いわけだが、それでは、なぜある人にとっては、何でもないことが、ある人にとっては、死ぬほど怖いということになるのだろうか。それは、その人の持つて生まれた「性格や資質その他」などによる場合もあれば、また、過去に何か怖い経験をしたことがあるという場合もあるだろうし、あるいは、ただ単に先入観で「怖い」と思い込んでいるような場合もあり、その他、もう実にいろいろな場合があるかと思うが、ただ「怖い」という感情は、その人の「努力」によって、ある程度までは克服することができるわけである。

そして、その「怖い」という感情を克服していく過程においては、必ず、「勇氣」というものが、必要不可欠になって来るということである。つまり、「怖い」と思っていたものでも、「勇氣」を持つて、それを克服してしまえば、もう「怖い」という感情が消えてしまう場合もあれば、逆に、何としても、それに対する「恐怖心」が克服できない場合があるかと思うが、それは、すべて「その人自身の問題」になって来るということである。さて、「恐怖心」と「勇氣」との関係は、その人の「心の中」でお互いに「せめぎ合い」を行なっている状態であり、そのような時には、その人が行なおうとしている「行動」(言動)に、ためらいが生じている状態であるが、やがて、「勇氣」が「恐怖心」にうち勝てば、ふつうその人が行なおうとしていた「行動」(言動)を実際に行なうことになるだろうし、逆に、「恐怖心」が「勇氣」よりも勝れば、ふつうその人が行なおうとしていた「行動」(言動)を思い留まることになるだろう。そして、「恐怖心」と「勇氣」とがほぼ拮抗している場合には、いつまで経っても、決断がつかない状態が続くということである。

六、真の勇氣とは

もちろん、ここで言う「勇氣」とは、極めて広い意味での「勇氣」であり、それは、その人の「心の中」に生じて来た「恐怖心」と闘って、何とかそれを克服しようとしている「心の働き」であり、そのような「心の働き」のなかにこそ、いわゆる「勇氣」というものは、存在することになるのである。それでは、もっと狭い意味での「勇氣」(つまり真の「勇氣」とは、一体、どういうものかと問えば、それは、次のようになるかと思う。例えば、車を猛スピードで走らせるには、それなりの「勇氣」が必要になって来るかと

思うが、しかし、ただ意味なく車を猛スピードで走らせるだけでは、単なる「暴走」になつてしまふだろう。また、それは、どういうことであれ、意味もなく危険なことを敢えて行なうことも、真の「勇氣」とは呼べないだろう。あるいは万引きや放火、その他、そのような犯罪的な「行為」を行なう時にも、ある意味での「勇氣」が必要になつて来るかと思うが、しかし、そのような犯罪的な「行為」を行なうための「勇氣」というのは、決して真の「勇氣」とは言えず、それは、単なる理性を欠いた「蛮勇」に過ぎないということである。それでは、一体、どういう形での「勇氣」が、真の「勇氣」となり得るのかと言え、それは、いわゆる「愛の実践」のなかで行なわれる「行動」（言動）こそは、まさに真に「勇氣ある行為」となるのである。それでは、「愛の実践」とは、一体、何かと問えば、それは、どういうことであれ、真に優れた活動を行なおうとして実際に真に優れた活動を行なっている状態のことであるが、そのような真に優れた活動を行なうために、どうしても必要となる「勇氣」こそは、まさに真の「勇氣」となり得るものである。

例えば、政治家であれば、真に優れた政治を行なおうとして、実際に真に優れた政治を行なっている状態こそは、まさに政治家としての「愛の実践」であるとともに、そのような真に優れた教育活動を行なうために、どうしても必要となる「勇氣」こそは、まさに真の「勇氣」となるものである。また、医師であれば、真に優れた医療を行なおうとして、実際に真に優れた医療を行なっている状態こそは、まさに医師としての「愛の実践」であるとともに、そのような真に優れた医療活動を行なうために、どうしても必要となる「勇氣」こそは、まさに真の「勇氣」となるものである。その他、それは、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、もうどのような「分野・領域」の人たちであるを問わず、真に優れた活動を行なおうとして、実際に真に優れた活動を行なっている状態こそは、まさに人間としての「愛の実践」であるとともに、そのような真に優れた活動を実際に行なうために、どうしても必要となる「勇氣」こそは、まさに真の「勇氣」ということである。

例えば、夏、海水浴などで水に溺れている人を見つけたライフセーバーの人たちは、その溺れている人を何とか助け出そうとするわけだが、そのような「行為」こそは、まさに「愛の実践」であり、そして、自分自身も水に溺れる危険性があるにもかかわらず、敢えて水に溺れている人を何とか助け出そうとしている「行為」（行動）こそは、まさに真に「勇氣ある行為」であるとともに、水に溺れている人を何とか助け出そうとするために、どうしても必要となる「勇氣」こそは、まさに真の「勇氣」となるものである。——つまり、真の「勇氣」とは、すなわち、「愛の実践」の中にこそ、実在するということである。

——ただ、ここで問題になるのは、無理をして「愛の実践」などを行なうことによつて、その人に様々な「禍」（被害、損害、不幸、その他）などをもたらすことも極めて多いわけであり、それゆえ、無理をして「愛の実践」など行なわないのが、いちばんよいのだという「考え方」が、当然、生じて来るかと思うが、それは、まさに「自己愛」から生じて来るものであり、誰でも自分がいちばん可愛いわけだから、極めて自然な感情なのである。それゆえ、ここでも「恐怖心」と「勇氣」とが、その人の「心の中」でお互いに「せ

めぎ合い」を行なうことになるが、それは、すべてその人自身の「考えや判断」に任せるべきであり、他人が無理やり強制すべきものではないし、また、自分でも無理をしてまで行なうべきものではないのである。ただ、真の「勇氣」とは、一体、どこにあるのかと問われれば、それは、まさに「愛の実践」の中にこそ、確かに「実在する」と、答えるしかないということである。

七、勇氣そのもの

最後に、「勇氣」そのものとは、一体、何かと問えば、それは、まさに「勇ましい意気」のことであり、われわれの「心の中」に生じて来る「恐怖心」と闘い、その「恐怖心」を何とか克服しながら、何らかのことに挑もうとする、まさに「チャレンジ精神」（つまり「挑む気概」）のことであり、その「チャレンジ精神」こそは、その人をして何らかの意味で「前進・進歩」させているとともに、われわれ人類の「文化・文明」をここまで「前進・進歩」させてきた、まさに「原動力」であると言ってもよいのだろう。なぜなら、われわれ人間の「心の中」に生じて来る「恐怖心」にいつも負けてしまい、敢えて何かに挑もうということが、まったくたくないならば、そこから何かが生まれて来るということは、ほとんど期待できないことになるからである。とは言え、明らかに間違った方向への「勇氣」(チャレンジ精神)は、かえって、まわりのものに害を与えるだけの単なる理性を欠いた「蛮勇」に過ぎないということである。それゆえ、われわれ人間を真の意味で「前進・進歩」させているものこそは、まさに真の「勇氣」であり、それは、いわゆる「愛の実践」の中にこそ、間違いなく、「実在」するということである。

*

*

ソクラテス賛美

ソクラテス賛美について

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかで、酒に酔い痴れたアルキビアデスという登場人物が、ソクラテスを「賞賛する」（つまり誉め讃える）という場面が出て来るが、それは、アルキビアデスという歴史上の人物が、まさにそのように感じていたということもあるだろうが、それ以上に、プラトン自身が、恐らく、ソクラテスという人物からまさに、「実感」として感じていたことの、心の底からの「吐露（告白）」になっっているかと思う。それでは、その部分を少し長くはなるが、引用してみたいと思う。

*

*

ところで、諸君、僕はソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喩による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるに違いないが、じっさいは、真実のためであつて、笑うためのものではないのだ。

さて、よくに言わせれば、この人は、彫像屋の店頭に置かれてあるあのシレノスの像に、まったくよく似ているよ。その像というのは、彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもつた姿に細工されたものであり、それを両方に開くと、内部におさめられている神々の像があらわれるというものだ。（中略）

ところで、あなたが彼と違う唯一の点は、同じことをするのに、楽器を使わずに散文でするということだ。ともかく、ぼくたちの経験を言えば、ほかのだれかがあなたと違う話をするばあいには、たとえ大雄弁家の口から出たものであつても、それを聞くぼくらは、だれ一人気にもとめないと言つていいだろうよ。ところが、あなたがじかに話したり、あるいは、あなたの話をほかの人が話つたりするのを聞けばあいいには、その話し手がひどく下手であつても、ぼくらはみな、男女年齢の区分なく、有頂天になつてしまひ、それに魅入られてしまふのだ。（中略）

じっさい、この人の話を聞くごとに、僕の心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバントスよりもずつとはげしい動悸がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。

ところが、ペリクレスや、ほかのすぐれた雄弁家たちの話を聞いたときには、うまいこと話すものだとは思つたけれども、いま言つたような目には、すこしもあわなかつた。ぼくの胸は、それによつてかき乱されることはなかつたし、奴隷の身になつたようないらだだしい気持になることもなかつた。ところが、ここにいるマルシユアス（つまりソクラテス）からは、ぼくは、いまのようなありさまでは自分の生活は生きるにも値しないと思われるような気持に、しばしばつき落とされたものだ。（中略）、また、ぼくは、数ある人間のなかでこの人にだけは、およそぼくの心にあるなんてだれ一人として思うまい気持を、つまり、相手がだれであれともかく恥じるといふ気持を、経験したのだ。この人にだけは、ぼくは恥じる気持を持つのだ。（中略）

そして、この人が、ぼくの譬えたところに、いかに似ていることか、また、この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかつていないのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。（中略）

いいかね、この人には、だれそれが美しいなんて、ぜんぜん問題にならないのだよ。また、金持ちであるとか、世間からもてはやされるような榮譽をもっているなどということも同じくね。かえって、心のうちでは、だれ一人思ってもみないほど軽蔑しているのだ。そして、それらの持ち物を一顧の価値もないものと見なし、また、われわれをなきにも等しいつまらぬ者と考えているのだ。ぼくはあえてこう言う。かくて彼は一生を通じ、人々に向かつては空とぼけ、ふざけているのだ。

しかし、この人がまじめになり、その扉が開かれるとき、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じた。そして要するに、ソクラテスの命じることなら何でもしたがわなければならぬと思われた。……（『饗宴』215b~217a）

一、賛美の理由

さて、プラトンは、『饗宴』の最後のところで、なぜ、「ソクラテスを賞賛する」ような文章を敢えてつけ加えたのだろうか？　むろん、それにもいろいろな理由があっただろうが、その最大のものは、やはり誰よりもプラトン自身が骨身に染みて感じていた、ソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、何とか説明したかったからに違いない。そして、そのソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、どうしたら最も確に説明でき得るだろうかと考えたすえに、やがて、「……諸君、ぼくはソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喩による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いのたねにするためだととるに違いないが、じつさいは、真実のためであつて、笑うためのものではないのだ。……」と。

次に、プラトンは、ソクラテスという人間は、次のようなものに非常によく似ているということから話し始めるわけである。つまり、「……さて、ぼくに言わせれば、この人は、彫像屋の店頭で置かれてあるあのシレノスの像に、まったくよく似ているよ。その像というのは、彫刻家の手によって、堅笛とか横笛をもった姿に細工されたものであり、それを両方に開くと、内部におさめられている神々の像があらわれるというものだ。……」

さて、ここに出てくる「シレノス」というのは、「……山野の精で、その特徴は、馬の耳を持ち、鼻は低く、体は、毛むくじやらの醜い老人だそうである。それに加えて、大変な知恵者であつたが、それをなかなか外に現わさなかつたという。早くからサテュロスとともに、ディオニュソスの従者と見なされるようになった」ということである。もちろん、プラトンが「シレノスの像」という例を挙げたのは、ソクラテスという人間の容貌がまさにそれに非常によく似ていたからであるが、それ以上に、ソクラテスという人間の「内部にあるもの」（その底知れぬ真の「凄さ」というものを、どうしてもここで様々な「実例」とともに説明しておきたかつたからに違いない。というのも、プラトンにしてみれば、確かに数多くの人たちが、ソクラテスという人間の「すぐれた面」をあれこれ賞賛（賛美）しているだろうが、しかし、ソクラテスという人間の「内部にあるもの」（その底知れぬ真の「凄さ」というものを、どの程度まで（つまりその最も奥深くにある中心核まで）徹底的に理解できているだろうか？　恐らく、できていないだろうという思いがあつたから

に違いない。

そして、そのような「思い」があればこそ、次のような言葉（文章）になるのである。つまり、「……しかしほかの点でも、この人は、ぼくの譬^{たと}えたところに、いかに似ていることか、また、この人のうちなる力がいかに驚くべきものであるか、それを諸君に聞いてもらいたい。これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっているのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。……」

二、ソクラテス理解

もちろん、これは、アルキビアデスの「言葉」（せりふ）として書かれているが、しかし、実際のアルキビアデスという歴史上の人物が、ソクラテスという人間をどの程度理解していたかと問えば、それは恐らく、ごく一般的な理解に留まっていただろう。それゆえ、表面的にはアルキビアデスの「ソクラテス賛美」という形式を取ってはいるが、しかし、実際は、プラトン自身の心の底からの「ソクラテス賛美」になっているということである。なぜなら、そのためにこそ、プラトンは、わざわざ『饗宴』の最後のところで様々な実例とともに、このような「ソクラテス賛美」を書き加えているわけである。

つまり、ここに出てくる、「……これは、よくおぼえておいて欲しいのだが、君らはだれ一人として、この人がわかっているのですぞ。だからこのぼくが、それをはっきりさせてやろう。すでにその仕事に手をつけたぼくとしては、当然のことだからね。……」ということは、すなわち、プラトンにしてみれば、当時、ソクラテスのまわりには数多くの仲間たちがいて、しかも、それぞれがそのソクラテスという人物の「すぐれた面」をあれこれ理解していたであろうが、しかし、自分以上にソクラテスという人間を徹底的かつその「最も奥深いところにあった中心核」まで、理解できている人間など誰もいないだろうと、プラトン自身は、密かに自負していたに違いない。

それでは、プラトンは、どうしてソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」まで辿り着けたのかと言えば、それは、言うまでもなく、プラトンは、長年（つまり何年も何十年）にも渡って、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、ただ単に外から見ていたのでは永遠に分からない、ソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」が、はつきりと見えてきたということである。そして、当時、ソクラテスを尊敬していた人たちは、数多くいたであろうが、しかし、ソクラテスという人間の「その最も奥深いところにあった中心核」まではつきりと観て取り、そのソクラテスという人間の底知れぬ真^{ほんとう}の「凄^{すこ}さ」というものを、心の底から「実感」として理解し得ていたのは、恐らく、プラトン一人だけだったに違いない。つまり、プラトンほどソクラテスという人間の底知れぬ真^{ほんとう}の「凄^{すこ}さ」というものを「実感」として深く理解し得た人は、誰もいなかった、ということである。（それは、それ以後も誰もいえないと言ってもよいほどである。）

逆に言えば、もし、プラトンが、長年、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を、わが身を以って、徹底的に生きてみるということを行なわなかったならば、恐らく、プラトン自身も、ソクラテスという人間のその奥深くに

あった「凄さ」というものをほんとうには「実感」できずに、ほかの仲間たち程度の理解に留まったかも知れないのである。つまり、プラトンは、長年、ソクラテスになりきって、そのソクラテスの「内的世界」（特にその「思惟界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、初めて、プラトン自身も思いもかけないような感じで、そのソクラテスという人間の「最も奥深いところにあった中心核（つまり源泉）」が、はつきりと見えてきたということがある。

二、内部にあったもの

そして、引用文は、次のようになって行く。それは、「……この人がまじめになり、その扉が開かれる時、その内部の群像を見た者があるかどうか、ぼくは知らない。ところがこのぼくは、かつて、それを見たことがある。そして、それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じた」。

*

*

それでは、そのソクラテスという人間の「内部にあったもの」（……それらの像が世にも神々しく、金色燦然として、この世のものならず美しく、ただただ賛嘆に値するものと映じたもの）とは、一体、何かと問えば、それは、まさに「……思慮、節制、勇氣、正義、その他」の、いわゆる「徳」（優れたもの）ということになるかと思う。

そして、それら「徳」の実例として、例えば、ソクラテスが、ポテイダイアに出陣した時に、「……困苦に立ちむかう点について、この人は、ほかのだれよりもたちまさっていることや、冬の寒さに耐える強さという点でも、驚嘆すべき数々のふるまいをしたということ」などを初めとして、その時の出征中に、「……あるとき、彼は思索にふけり、朝早くから同じところに立ちつづけ、それからずっと翌朝の太陽が上がるまで、思索にふけて立ちつづけていたこと」や、また、戦闘中に、「……傷ついたぼくを見すてようとはせず、手をかしてくれ、ぼくをぼくの武器とともに無事救いだしてくれたこと……」。さらに、アテナイ軍が、デリオンから退却する時に、「……その自若さにおいて、この人がいかにラケスにたちまさっていたことか、そして《肩を怒らし闊歩して、横目でぎよろりぎよろり見ながら》、落ちていてあたりの敵味方を見まわし見まわし、人々のあいだをすすんで行ったために、この人も、その戦友も、戦場から無事に離脱することに成功した」など、実にいろいろな実例を挙げることになるわけである。

三、演説形式

それは、つまり、プラトン自身、どうしても様々な「実例」とともに、ソクラテスという人間の底知れぬ「真の「凄さ」というものを是非とも書き残しておきたかったからに違いない。しかし、一体、どこでどのようにして書いたらよいのだろうか？ というのも、プラトンの「著書」の書き方というのは、その初期作品では、ほとんどソクラテスと対話相手との「一問一答」の「対話（吟味）形式」になっているので、そのような記述では、いわゆる「ソクラテスの賞賛」を書くということは、できにくい。そこで、この『饗宴』という一人ひとりに「エロス」を賞賛する「演説」をさせるといふ形式のその流れのなか

で、自然と無理なく最後のところで、今度は、「ソクラテスの賞賛」というものをまとめ書き残したわけである。それでは、なぜ、アルキビアデスに「ソクラテスの賞賛」をさせたのか？ ほかの人でもよかったのではないのか。或いは、プラトン自身が「ソクラテスの賞賛」を行なってもよかったのではないかとこの疑問が残るかも知れない。

それでは、なぜ「アルキビアデス」なのか？ その最大の理由としては、次のようなことではないかと思う。つまり、プラトンの「頭の中」（或いは「心の中」）にあった思い、というのは、ソクラテスという人物は、ただ単に「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）において真に優れていただけではなく、実は、実際の行動においても極めて優れていた人物であり、その証拠として様々な「実例」をぜひともここで書き残しておきたかったということである。そして、その様々な「実例」と直接深く関わっている「生き証人」としては、アルキビアデスという人物が、まさに「最適な人物」であったとともに、ソクラテスの「性的誘惑」に対する堅固さの実例としても、当時、アテナイ随一の「容姿・容貌」を誇っていたアルキビアデスの「性的誘惑」さえも容易に退けたということである。その点でも「最適な人物」だったということである。

四、内的成長（成熟）

それでは、ソクラテスをして、そういう様々な「徳」（「思慮、節制、勇氣、正義、その他」）などを持った人間たらしめていた「最も根源的な根拠（原因）」（つまりソクラテスの最も奥深くにあった中心核（源泉）とは、一体、何かと問えば、それこそ、まさにソクラテス自身もまったく自覚できない心の最も奥深い「無意識の世界」に内在していたであろう「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）（それを敢えて言えば、「内なる神」）であったとともに、ソクラテスの場合には、それに全面的に支配されていたということである。——それは、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて「心の眼」が開けると同時に、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも深く厳密に探求でき得るようになるということである。また、本能的に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行することになるとともに、真に「叡知」が働き始めることによって、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。

だからこそ、そのソクラテスの「言論」というのは、ほかの知識人たちとはまったく違って、次のようになって来るのである。それは、「……じつさい、この人の話を聞くごとに、ぼくの心臓は、あの秘儀に参じる熱狂的なコリュバンテスよりもずっとはげしい動悸（どうき）がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。」

ところが、ペリクレスや、ほかのすぐれた雄弁家たちの話を聞いたときには、うまいこと話すものだとは思ったけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかった。ぼくの胸は、それによってかき乱されることはなかったし、奴隷の身になったようないらだたしい気持になることもなかった。ところが、ここにいるマルシユアス（つまりソクラテス）からは、ぼくは、いまのようなありさまでは自分の生活は生きるにも値しないと思われるような気持に、しばしばつき落とされたものだ。（中略）、また、ぼくは、数ある人

間のなかでこの人にだけは、およそぼくの心にあるなんてだれ一人として思うまい気持を、つまり、相手がだれであれともかく恥じる、という気持を、経験したのだ。この人にだけは、ぼくは恥じる気持を持つのだ。……」（『饗宴』215e~216b）

*

*

そして、そのような「内的経験」こそは、ソクラテスに対してだけではなく、恐らく、シヤカ、孔子、そして、イエス・キリストなどと直接、親しく交わった人たち（例えば弟子たち）の、共通した「内的経験」だったに違いない。つまり、何かが違う。たとえ同じような内容の話をほかの知識人たちから聞いても、「……なるほど、うまいこと話すものだとは思うけれども、いま言ったような目には、すこしもあわなかつた。しかし一方、この人の話を聞くごとに、あの秘儀に参じる熱狂的なコリユバンテスよりもずっとはげしい動悸がし、涙が流れでるのだ。それはぼくだけでなく、これと同じ経験をした人を、ほかにもたくさん、ぼくは見ているのだ。……」と。

それでは、一体、どこがどのように違うというのだろうか？ それは、真に「内的成長（成熟）」を遂げて、いわゆる「心の眼」が開けては、真に「叡知」が働いている人間から生じて来る「言葉」と、未だ真に「内的成長（成熟）」を遂げていない人たちから生じて来る「言葉」との決定的な違いなのである。しかもソクラテス、シヤカ、孔子、そして、イエス・キリストと言った人たちは、われわれ人間のなかにある「欲望的部分、気概（激情）的部分、それに理知的部分」のなかでも、その人たちの「理知的部分」に全面的に支配されていた人たちであるが、そのなかのソクラテスという人は、まさに「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」に全幅の信頼を寄せて、それにどっぷりと身をまかせては、何よりも「真善美」を愛し求めてやまないような「魂」（精神状態）になっていたとともに、本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行しては、その「成熟的な道徳観」を、まさに徹底的に「実践し得た人」でもあつたわけである。

五、結び

最後に、もう一度、再確認しておきたいと思うが、プラトンは、どうしてもソクラテスという人間の底知れぬ真の「凄さ」というものを、何とか説明したいと思ひ、やがて、「……ところで、諸君、ぼくはソクラテスの賞賛を、こういう仕方で行ってみようと思うのだ。それは、比喻による方法である。だが、この人は、自分をもの笑いの種にするためだとするに違いないが、じつさいは、真実のためであつて、笑うためのものではないのだ。」ということから書き始めるわけである。

つまり、プラトンがここで特に言いたかつたことは、次のようなことである。それは、ソクラテスが現に生きていた、その当時から、ソクラテスという人は、いろいろと誤解されることの多かつた人であつたが、しかし、それは、あくまでも外から見た「表面的なソクラテス像」に過ぎず、それは、決して、真の「ソクラテス像」などではなく、むしろ、その奥に隠されている「ソクラテス像」こそは、まさに真正正銘の「真のソクラテス像」であるとして、それを、プラトンは、わかりやすく、まさに「シレノスの像」（つまり「比喻による方法」）によって説明しようとしたということである。

そして、表面的にはアルキビアデスの「告白」という形を取ってはいるが、しかし、実際は、プラトン自身がソクラテスという人物をどのように見ていたかの心の底からの「告白」ということになるのである。そして、もう一度、最初の引用文を、一字一句、丁寧に読んでもらえれば、プラトン自身の心の底からの「告白」（敢えて「肉声」）をはっきりと聴くことができ得るだろうと思う。

*

*

「脳の発達」と「心の発達」との関係

「脳の発達」と「心の発達」との関係

まず、われわれ人間の「脳」というのは、ほかの動物たちのように「ほぼ完成された状態」で生まれて来るのではなく、われわれ人間の「脳」というのは、いわば「未完成の状態」で生まれて来るということである。これは、実に画期的なことではないかと思う。というのも、生まれ落ちたあと、その赤ん坊をどのような「環境」に置くかによって、その赤ん坊の「脳の発達」（つまり「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」）というものは、どのようにも形成させることができ得る可能性が残されているということである。つまり、われわれ人間の「脳」というのは、その置かれた「環境」に応じた「脳」になっていくということである。

一方、人間以外のほかの動物たちの「脳」というのは、そのシナプス結合がほぼでき上がった状態で生まれてきて、あとは「模倣の時期」（つまり「まねる」）ということが残されている程度なのである。それゆえ、われわれ人間のような「創造の時期」（つまり「やる気を起こす神経細胞の回路網^{ネットワーク}の形成」というものがないので、意欲を持っていろいろな活動を積極的に行なうということとは、基本的にはなく、いわば「本能的な欲求」に応じて活動している状態になるということである。

一、脳の発達とは

一方、われわれ人間の「脳の発達」というものを考えてみると、まず最初は、生まれてから三歳ぐらいまでに最も基本的な「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」が形成されることになるわけである。それは、赤ん坊をとりまくまわりの環境や赤ん坊に接する保護者の言動などをそのままそっくり模倣して、シナプス結合を進めていき、そして、とくに「知の座」の神経細胞が急速に連絡し合うようになるわけである。

例えば、われわれ人間の「最初の記憶」というのは、一体、何歳頃から始まるのかと問えば、もちろん、個人差はあるだろうが、だいたい三歳前後からではないかと思う。ということとは、いわゆる前述の「脳の発達」と極めて深い関係にあるということである。

次に、三歳を過ぎると、模倣によってつくられた「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」を自分で使うとする働き、つまり、やる気を持った神経細胞のシナプス結合が進んで、働きだす。それは、いわゆる「情と意の座」の神経細胞の連絡が急速に発達し、そして、一〇歳頃までには、だいたいそれら全体の神経細胞のシナプス結合（つまり「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」の形成）が、ほぼでき上がることになるということである。

二、特化の「脳の発達」

さて、これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、母親の胎内にいる時期をも含めて、われわれ人間の「脳」というのは、だいたい一〇歳ぐらいまでに、その基本的な「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」がほぼでき上がるということである。ということは、例えば、音楽家のモーツァルトは、父親が宮廷音楽家であったので、当然のことながら、母親の胎内にいる時から、いろいろな音楽を数多く聴いていたであろうし、また、この世に誕生してからも、ほとんど「音楽漬け」であったと言ってもよいの

だろう。それは、極めて膨大な量の音楽の蓄積（蓄え）と、三歳の時から始めたというチエンバロ（ピアノの前身）という楽器演奏の絶えざる練習などによって、モーツアルトの「脳」というのは、一般の人たちとはまったく違った、まさに音楽用の「神経細胞の回路網」^{ネットワーク}が形成されたというものであり、これは、なにもモーツアルトに限ったことではない。

例えば、そろばんのような習い事であっても、その子供がまさに「そろばん漬け」のような毎日を一〇歳ぐらいまで徹底的に続けるならば、その子供の「脳」というのは、まさに、そろばん用の「神経細胞の回路網」^{ネットワーク}が形成されることになるわけである。それゆえ、一般の人たちには想像もできないような「計算（暗算）」なども、楽々とできるようになるということである。それは、将棋や囲碁、あるいは語学、スポーツ、その他、すべての場合について言えることである。

例えば、野球であれば、その野球を、毎日、徹底的に行なうことによって、理屈ではなく、まさに「体で野球を覚えることになる」ということは、昔から言われていたことである。しかし、今日では、それだけではなく、幼い頃から、まさに「野球漬け」のような毎日を徹底的に続けるならば、いわゆる「体が野球用になる」だけではなく、実は、その子供の「脳」までが、まさに野球用の「神経細胞の回路網」^{ネットワーク}になるということである。つまり、野球に最も適した「脳と体」がで上がるということである。

それは、サッカー、水泳、ゴルフ、テニス、その他、どのようなスポーツであってもまったく同じことが言えるわけである。つまり、サッカーなら、サッカー用の「脳と体」がで上がり、また、ゴルフであれば、ゴルフ用の「脳と体」になり、そして、テニスであれば、テニス用の「脳と体」がで上がるということである。しかも、その子供の父親（或いは母親）が同じスポーツの元有力選手などであれば、その子供は、まさに二十四時間体制でその親から専門的な指導を徹底的に受けることになるので、それだけその子供は、まさに天才的なスポーツ選手になり得る可能性が、それだけ高くなるわけである。

これは、音楽や習い事あるいはスポーツなどに限ったことではなく、われわれ人間の「脳」というものが、前述のように一〇歳ぐらいまでにその基本的な「神経細胞の回路網」^{ネットワーク}がで上がるとするならば、幼い頃からあることを徹底的に行なうようにすれば、その子供は、まさに、それ用の「脳と体」を持った「スペシャリスト」に育て上げることができ得るということである。もちろん、その人の持つて生まれた「素質や才能あるいは天分」などによっても違ってくるだろうが、基本的にはそういうことが言えるわけである。それゆえ、若しもその子供がその「素質や才能あるいは天分」（つまり「遺伝的要素」）にも十分に恵まれているならば、その子供は、間違いなく、やがて、その分野の世界的な「スペシャリスト」になり得る可能性は、極めて高くなるということである。

三、一般の「脳の発達」

さて、今までは「脳の発達」の極めて特殊な場合を考えてみたわけであるが、今度は、われわれ人間のごく一般的な「脳の発達」と「心の発達」との関係について、少し考えてみたいと思う。

*

*

まず最初に、われわれ人間というのは、いわゆる「母体のようなもの」をうちに宿して

この世に生まれて来る。そして、その「母体のようなもの」というのは、未だ「知性や理性とも呼べないような渾然一体となっている状態」ではあるが、その母体の内には、いわば「善の遺伝子」（或いは「善のDNA」というものを宿していることになる。もしそうでなければ、われわれ人間というのは、そもそも「善」という意識を持つことすらできないだろう。——つまり、この地球上に何十億といる全人類のすべての人たちが、たった一人の例外なく、文字通り、一人一人すべての人たちが、いわゆる「善」という意識を持ち合わせているとすれば、それは、決して「後天的なもの」（つまり「生まれたあと身につけるようなもの」）では決してなく、それは、まさに「先天的なもの」、つまり、生まれながらに「善の遺伝子」（或いは「善のDNA」というものをうちに宿して、この世に生まれて来るという、何よりも「絶対的証拠」となり得るものである。

そして、誕生からの実に様々な「経験や学習」などによって、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）は、順調に成長をして、やがて「知性」（或いは「知性的部分」と「理性」（或いは「理性的部分」）とが自然発生的に生じて、いわゆる「理知的部分」（それは「知性+理性+母体のようなもの」をはっきりと形成し、その「思惟界」を明るく照らし出すようになるわけである。それが、一〇歳頃までになるかと思う。

そして、この頃から「自我が目覚めはじめることになる。それは、小学四年生ぐらいからである。そして、「中・高時代」に入ると、「第二次性徴とともに、自我がはっきりと目覚める」ことよって、外に向いていた目を内へも向けるようになり、例えば、人間とは何か、どう生きたらよいのか、自分とは何か、また、善とは、悪とは、生とは、死とは、その他、そのような「根本的な問い」（つまり「哲学的自問自答」）を自ら始めるようになるということである。それが、まさに「中・高時代」になるかと思う。

もちろん、この時期は、まさに「知的好奇心」の極めて旺盛な時期でもあるので、例えば、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、漫画、絵本、イラスト、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他、実に様々なものに対して、非常に強い「興味や関心」などを示すものである。

そして、高校を「卒業する頃」には、大体、一般的な「大脳の発達」は、一応終わることになるかと思う。つまり、その人の人間としての「神経細胞の回路網」は、ほぼでき上がることになるわけである。それゆえ、そのでき上がった「神経細胞の回路網」（つまり「脳の働き」があれば、その人が人間としてふつうに「仕事、生活、遊び、その他」などを行なう上において、ほとんど何の不自由もない状態になるかと思う。それを、富士山で言えば、ちょうど「五合目」ぐらいの高さのところにあたるということである。

四、五合目から頂上へ

それでは、五合目から頂上までは、一体、何のためにあるのかと問えば、それは、まさに「専門的な知識や技術などを本格的に学ぶための段階」としてあるとともに、それによつてこそ、ほぼでき上がっていた、その人の一般的な「神経細胞の回路網」を、さらに、より緻密な「神経細胞の回路網」へと進化（バージョンアップ）させるためにこそ、あるということである。

つまり、この時期は、一般的には様々な書物を深く読んだり、文学や芸術などに深くた

ずさわったり、また、大学やその他で専門的な「知識や技術」などを学んだり、あるいは大学院やその他の分野で何らかの「研究活動」などを真剣に行なうという、そういう本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねることによって、その人の「思考（思索）能力」というものは、真に鍛えられ、真に育っていくことになるということである。

ただ、ここで最も大事なことは、次のようなことである。それは、この時期に、その人が自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（或いは「真善美」欲）に真に襲われるかどうかということである。それをプラトン風に言えば、それこそは、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）であり、そのような「神的な恋（エロス）」に真に襲われない限りは、その人は、真に「内的成長」することはできない。

さて、その人が自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）、そのような「神的な恋（エロス）」に真に襲われることによってこそ、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねていくこととなり、その結果として、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと次から次へとその「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既存概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考えなども空中分解して、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけである。それが、まさに「虚無の世界」であり、そのような「虚無の世界」のまさにどん底から、やがて富士山の頂上へと辿り着くことによってこそ、その人の根底からの、「自己改革」が真に成就したということであるとともに、それは、すなわち、いわゆる「内的成長」の一つの到達点に達した、ということにもなるわけである。

そして、その根底からの、「自己改革」が真に成就することによってこそ、今までの本能に深く根ざした「旧式のコンピューター」（つまり一般的な「神経細胞の回路網」^{ネットワーク}）の脳）が形成されて、いわゆる「三つの収穫」を得ることになるわけである。

一つは、「心の眼」が開けることによって、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に探求でき得るようになるということである。それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の「イデア」を愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまないような、そういう真の「愛知者」になるということである。

一つは、「愛」をうちに宿すことによって、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。そして、その真の「愛」は、巨大な「エネルギー源」でもあり、それゆえ、その人をして何らかの社会的な活動へとつき動かすものであるが、その結果として、何か真に優れた人類的な「発明、発見、創造、行動、その他」などが生み出されることにもなるということである。

そして、もう一つは、今までの「知性・理性・感性」から、より高い「知性・理性・感性」となって、真に「叡知」が働き始めるということである。そして、真に「叡知」が働き始めることによって、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密に

でき得るようになるということである。

五、新型の「脳」

つまり、真に「内的成長（成熟）」することによって、今までの本能に深く根ざした「旧式のコンピュータ」（つまり一般的な「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」の脳）から、より高性能の「新型のコンピュータ」（つまりより緻密な「神経細胞の回路網^{ネットワーク}」の脳）が形成されて、いわゆる「三つの収穫」を得ることになるが、それは、言葉を換えれば、まさに「自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として新たに誕生する」ということでもあるわけである。

もちろん、真に「内的成長（成熟）」したばかりでは、まだその「三つの収穫」は、思うように機能しないかも知れないが、しかし、その後も必要な努力を積み重ねていくことによつて、その「三つの収穫」は、その人なりに機能するようになるかと思う。——というのも、たとえ同じように「内的成長（成熟）」したとしても、その人の持つて生まれた「素質や才能あるいは天分」というものには、当然のことながら、いわゆる「個人差」があるということであり、それゆえ、たとえ同じように「内的成長（成熟）」したとしても、その後は、その人の持つて生まれた「素質や才能あるいは天分」などによつて、あるいは、その人の持つて生まれた「資質や性格あるいは志向」などによつて、それぞれ「その人なりの方向」へと向かっていくことになるということである。

*

*

孔子とソクラテスの共通点

孔子とソクラテスの共通点

例えば、『論語』のなかで、孔子は、「……吾知ることあらんや、知ることなきなり。雖夫（田舎の無知な人）あり、来たりて我に問う。空空如たり（まじめな態度なり）。我その両端を叩いて竭くす」という有名な言葉があるが、これなどは、ソクラテスが、「……自分は何も知らない、ただ相手の問いや答えに対して、それは、こういうことではないかと、自分も一諸になって、いろいろな角度から徹底的に考えたり、また、徹底的に吟味を尽くすだけである」という立場と、まったく同じものであり、それこそは、まさにソクラテスの「対話（吟味）活動」（つまり「哲学的問答法」）の「原点」そのものである。

また、孔子の「……知れるを知るとなし、知らざるを知らずとなす」というこの言葉は、そのままソクラテスの「自分は知らないから、知らないと思う」という、あの有名な「無知の知」（或いは「無知の自覚」）と基本的にはまったく一つに重なり合うものである。——つまり、孔子も、ソクラテスも、最初から、いわゆる「世の物知りたち」というものを全く問題にしていなかった。なぜなら、「世の物知りたち」は、自分は、もうそのことについてはすでによく知っていると思ひ込んでいるために、あるいは人や書物などから得た他人の「知識」などをそのまま受け入れて、すでに知っているつもりになっているために、そのことについてあらためてあらゆる角度から徹底的に「考え直してみる」という、つまり、「問いと疑問」とを無限に積み重ねては、どこまでも徹底的に「自ら考え深めていく」という、最も大事な「思考（思索）活動」そのものが、まったく欠落している、或いは、不十分であると考えていたからである。

また、孔子には、「……吾が道は、一以てこれを貫く」という有名な言葉があるが、むしろ、それにもいろいろな解釈が得られるだろうが、例えば、上述のような「態度」を、「一以てこれを貫く」というように言えなくもないし、また、『論語』のなかの曾子は、それに対して、「夫子の道は、忠恕のみ」（つまり「先生の道は、忠恕（真心と思いやり）に他ならない」と答えている。そこで、仮に、ここではその解釈に素直に従ってみるならば、その「忠恕」（つまり見せかけではない本当の「真心と思いやり」）の出どころ「源泉」は、一体、どこにあるのか、ということになるかと思うが、それこそは、まさに孔子という人間の「魂」の最も奥深いところで生き生きと躍動していたであろう、その「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からということになるのだろう。

つまり、われわれ人間というのは、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされているわけだが、一方、そのような「欲望的部分」や「気概（激情）的部分」などの支配から解放されて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されているような人（例えば、孔子のような人）であれば、その人の思惟主体である「知性＋理性」は、いわゆる「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの全面的な働き（作用）を受けて、より高い「知性＋理性」となり、そのより高い「知性＋理性」となった「理知的部分」が行なう本格的な「思考（思索）活動」によってこそ、弟子をはじめ、いろいろな分野の人たちとの「対話（議論）」などに臨んだ時にも、まさに『時に中す』（つまりその時その時に最も的確で「的を射た）数多くの「生きた言葉」（つまり「生命を宿した言葉」）が、生き生きと孔子の「口」からあふれ出てきたということである。それは、真に「内的成長（成熟）」をして、その人のなかで「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）が

生き生きと躍動している人間だけに可能なことであり、それは、ソクラテスの場合にも全く同じことが言えるのである。——そして、孔子は、「下学かがくして上達す」(つまり、下は、人間社会の諸問題から学びはじめ、やがて、上は、天命を知るまでに至った)人であるが、晩年の孔子は、「……我を知る莫なきかな。(中略)、天をも怨うらまず、人をも咎とがめず、下学かがくして上達す。我を知る者はそれ天か」という心境になっていたということである。

それは、晩年のソクラテスの場合にも、朝早くから遊歩道や体育場、また、広場(市場)や街頭、その他に出かけて行つては、いろいろな人たちと積極的に「対話(吟味)活動」を行なうことを、いわば毎日の日課のようにしていたわけであるが、それでは、ソクラテスは、一体、何のためにそのような活動をしていたのか、その「真意」をほんとうに理解している人など、恐らく、誰もいなかっただろう。つまり、晩年のソクラテスも、孔子と同じように、「我を知る莫なきかな」(つまり「自分をほんとうに理解している人など誰もいないだろうなあ」と言えたはずであり、また、「我を知る者はそれ天か」とも言えたはずである。——なぜなら、晩年のソクラテスは、アテナイ人の「心の眼」を目覚めさせるために、つまり、多くの人たちの実に様々な「無知」(＝思い違い)などをはつきりと自覚させるために、また、何よりも「魂」を大切にしようにと、毎日のように「対話(吟味)活動」を行なっていたのも、ほんとうのことを言えば、すべて「神からの絶対的な命令」(つまり「天命」)を受けていたからであり、そのような非常にはつきりとした使命感を持つて、死ぬまで積極的に活動をし続けた人だからである。

そして、そのような晩年のソクラテスの心の最も奥深いところにあつたであろう「真意」は、例の「裁判」の時に、(恐らく)、初めて、弟子をはじめ、多くの陪審員たち(アテナイの人たち)の前で、ソクラテス自身の「口」から、はつきりと「明言(吐露)」されることになる。これは、実に驚くべきことであり、われわれ人間は、自分の心の最も奥深いところにある「思い」(つまり自分の「魂」の核心部分)について、大勢の人の前ではつきりと「明言(吐露)」することは、極めて少ないことであり、それゆえ、若しも「裁判」に訴えられるということがなかつたならば、恐らく、ソクラテス自身の「口」から、あれほどはつきりと聴くということは永遠になかつたかも知れないのである。それゆえ、プラトンの『ソクラテスの弁明』という作品こそは、もちろん、いろいろと脚色が施されているとしても、歴史上のソクラテスという人間を知る上で、最も大事な文献となり得るものであるとともに、最も美しくかつ最も優れた「珠玉の作品」の一つになるかと思う。なぜなら、その「作品」からは、ソクラテスという人間の「考えや思想」が、まるで「生きた言葉(敢えて肉声)」の如くに生き生きと聞こえてくるからである。

それでは、もう一度、孔子の「吾が道は、一以てこれを貫く」という言葉に戻りたいと思うが、孔子も、ソクラテスも、まさに「一以てこれを貫いて」いた人たちであり、それは、何よりも「真実・真理」(或いは「真善美」)などを愛し求めてやまないという真の「愛知者」(或いは「好学者」)であつたということであるとともに、そのように何よりも「真実・真理」(或いは「真善美」)などを愛し求めてやまないように根底から絶えずつき動かしていたものこそは、まさに「母体のようなもの」(内に「善のDNA」を宿す)からであり、それが彼らの「魂」のなかで生き生きと躍動していたということである。そして、彼らは、もう一方の「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などに身を任せることはあまりなく、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されていたので、彼らの思惟主

体である「知性＋理性」というのは、まさに「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）からの全面的な働き（作用）を受けて、より高い「知性＋理性」となり、そのより高い「知性＋理性」となった「理知的部分」が行なう本格的な「思考（思索）活動」によってこそ、弟子をはじめ、いろいろな分野の人たちとの「対話（議論）」などに臨んだ時にも、まさに『時に中ず』（つまりその時その時に最も確で「的を射た」）数多くの「生きた言葉」（つまり「生命を宿した言葉」）が、生き生きとその人の「口」からあふれ出て来たとともに、彼らの「言動」のほとんどすべては、まさにその「母体のようなもの」（内に「善のDNA」を宿す）から発し、そこから生み出されていたと言ってもよいのだろう。それが、恐らく、「吾が道は、一以てこれを貫く」という言葉の真意になるかと思う。

*

*

わが道は

一以て貫く

孔子かな

子路

子路について

例えば、孔子は、子路の「勇」を好む性格をみて、いわゆる「その死を得ざらん」と言うわけだが、それは、一体、どういう意味合いになるのかと言えば、それをプラトン風に解釈すれば、孔子自身は、すでにいわゆる「理性的部分」に全面的に支配されている「心的状態」になっていただろうが、一方、「勇」を好む性格の子路は、むしろ「気概(激情)的部分」に支配されていたことになるかと思う。そこで、孔子は、いわゆる「気概(激情)的部分」に支配されている子路を見て、まさに「その死を得ざらん」と予言することになるわけである。それでは、なぜ「気概(激情)的部分」に支配されていると、どうして「その死を得ざらん」(つまり「ふつうの死に方はできまい」ということになるのか? それは、いわゆる「気概(激情)的部分」に支配されていたのでは、どうしても他人とないかにつけてぶつかり合うことが多くなるとともに、そのぶつかり合った時にも、どうしても自分の方から身を引くということができず、最後まで張り合ってしまうことが多くなり、それだけ危険に身をさらして、その身を滅ぼす可能性が高くなるからである。

もちろん、われわれ人間にとっていわゆる「気概」というものがなければ、いわば腑抜けのようになってしまうので、ある程度は必要不可欠なものではあるが、ただ問題は、その「気概」の有り様なのである。それは、一体、どういう意味合いかと言えば、それは、次のようになるかと思う。つまり、われわれ人間の「魂」をプラトン風に区分するならば、それは、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理性的部分」に分かれるわけであるが、その場合、若しもその人の「理性的部分」がまだ未熟な状態であれば、当然のことながら、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を厳密に行なうことはできない。しかも、その人が「気概(激情)的部分」に支配されているような人であれば、例えば、勇気でもないことを何か勇気だと思いついで、逆に無謀で愚かなことを行なったり、また、正義でもないことを何か正義だと思いついで、かえって不正なことを行なったり、その他、そのような「無知」(つまり「中途半端で間違った判断」等)を持って、安易に「行動」(言動)するからこそ、自分に対しても、また、他人に対しても、あるいは社会や国家などに対しても、実に様々な「禍」(不幸)をもたらすことにもなるわけである。

一方、その人の「理性的部分」がそれなりに成熟している状態であっても、様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまえば、同じように様々な問題をひき起こす可能性が高くなるわけで、それゆえ、大事なことは、いわゆる「理性的部分」に全面的に支配されることであるが、その「理性的部分」に全面的に支配されるためには、どうしても真に「内的成長(成熟)」することが、何よりも必要不可欠になって来るといえることである。なぜなら、真に「内的成長(成熟)」することによってこそ、その人は、いわゆる「理性的部分」に全面的に支配される「心的状態」になるからである。それでは、真に「内的成長(成熟)」をすれば、もう二度と様々な「欲望や感情」などに振りまわされることはなくなるのかと言えば、もちろん、生身の肉体を持ち合わせている限りは、常に、様々な「欲望や感情」などに振りまわされる可能性があるわけだが、その時には、まさに「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」に支配されている「心的状態」になっているということである。

それでは、真に「内的成長(成熟)」をしようとしまいと全く同じではないかと反論があるかと思うが、ただ、違いがあるとすれば、真に「内的成長(成熟)」することによつ

て、たとえその時は様々な「欲望や感情」などに振りまわされたとしても、やがて元通りの「心の状態」(つまり「理知的部分」に全面的に支配されている心的状態)に戻ることで、でき得るということである。——それは、例えば、静かな「湖水の面」に風が吹いたり、鳥が飛び立てば、その静かな「湖水の面」には大小様々な波紋が広がることになるが、しかし、だからと言って、そのような状態が長く続くというようなことはなく、やがて、静かな「湖水の面」に戻っていくようなものである。そして、そのような「心の状態」になっっているということこそは、まさに真に「内的成長(成熟)」を遂げているという証しにもなるわけである。

*

*

「参考文献」

- ※底本「世界の名著」『プラトンⅠ』（中央公論社）
- ※底本「世界の名著」『孔子・孟子』（中央公論社）